

資料(Data)

折り紙のルーツを訪ねるドイツの旅

A Research Tour of the Origin of ORIGAMI in Germany

大森 隆子*
ŌMORI, Takako*

キーワード：折り紙のルーツ, ドイツ, ドレスデン

Key words : Origin of ORIGAMI, Germany, Dresden

はじめに

筆者は、折り紙研究の過程で、Wikipedia 中「折り紙」の〈ヨーロッパの折り紙〉の項目に記述されていた「ドイツのゲルマン国立博物館およびザクセンフォークアート美術館に、19 世紀前半に折られたものと推定されている作品群が所蔵されている。ヨーロッパの折り紙は、フリードリヒ・フレーベルの幼児教育法に取り入れられ、日本の開国にともない日本に伝わった」¹⁾ という文言に大変興味を引かれた。両館に所蔵されているという作品群の名前・図や写真は紹介されておらず、実像は不明である。本当にあるのだろうか、また一体どのようなものなのだろう。いつしかその二つの施設を訪ねて、収蔵されているという折り紙作品を見たい、またヨーロッパ独自の折り紙が明治維新後に日本に伝えられたという折り紙の伝達経路に関する記述についても確かめたいと考えていた。

現在、上述の辞典の記述を一例として、折り紙の発祥や伝播に関して様々に語られているものの、定説は確立されていない。近年は主としてインターネット上で諸氏により多様な説が展開されている。前述の Wikipedia では折り紙全体のルーツに関して次のように記してある。

折り紙の起源は明らかになっていない。中国起源説、日本起源説、スペイン起源説等があるが、いずれも推測の域を出ない。中国起源説は製紙の起源が中国であることから、折り紙の起源も中国であろうとの説で根拠は乏しい。日本の折り紙は下記のように他から伝わったものではなく独自に発達したもののようである。19 世紀にはヨーロッパにも独立した折り紙の伝統があり、日本の開国と共に両者が融合した。現在では日本語の「折り紙」という言葉が世界に浸透しており、欧米をはじめ多くの国で「ORIGAMI」という言葉が通用する。現代の折り紙はヨーロッパを起源とするものである。²⁾

これによると、ヨーロッパを始めとして世界各地に起源説があること、しかしながらそれぞれの根拠については確認されていないと解説されている。

筆者が注目する論としては、折り紙作家、羽鳥公士郎の研究を挙げたい。羽鳥は自身のホームページで、折り紙の歴史について詳細な研究報告・自説を紹介しており、示唆に富む。同ホームページより「折り紙の歴史」中の〈ヨーロッパの古典折り紙〉の項目から該当箇所を引用する。それは、

折り紙は日本独自の文化ではなかった。13世紀にヨハネス・デ・サクスボスコ（ジョン・オブ・ハリウッド）が書いた『天球論』は、17世紀中葉まで60以上の版を重ねたが、そのうち、1490年にベニスで印刷されたものの挿し絵に、『欄間図式』の荷船と同じ絵が認められる。もしもこれが本当に折り紙の舟だとすると、当時の日本の折り紙は、あったとしても礼法折り紙だろうから、日本から伝わった可能性は考えにくい。

また、1614年ごろ初演され、1623年に出版された、ジョン・ウェブスターの戯曲『モルフィ侯爵夫人』に「紙の牢獄（paper prison）なるものが登場する。これが、現在「風船」と呼ばれている折り紙だという可能性がある。日本の資料に風船が登場するのは、明治時代以降である。

19世紀になると、折り紙に言及したと断定できる資料が、ヨーロッパ各地に散見されるようになる。なかでも、ニュルンベルグのゲルマン国立博物館やドレスデンのザクセンフォークアート美術館には、1810年から20年ごろに折られたものと考えられている、騎士や馬の折り紙が収められている。³⁾ である。氏は二つの館に収蔵されている折り紙の具体像を明示すると同時に、引用文中の事例に加えて、フレーベルの恩物中の折り紙やスペインの折り紙「小鳥(pajarita)」の事例も引き、それらは年代的に見て日本とヨーロッパの交流での産物とは考えにくいことをもって、折り紙は日欧で独立して起こったものとの考えを示している。

前述した Wikipedia と重なる記述—すなわち当時折られた作品がドイツの二施設に保存・展示されている—を実際に確かめて、今後の折り紙のルーツ研究の手掛かりにしたいとの思いから両施設を主とした折り紙探索の旅を立て実行した。以下に報告を行う。

1. 旅程と対象施設

平成 24 年 2 月 22 日（木）中部国際空港発 10：55 フランクフルト着 15：25

フランクフルト発 17：05 ベルリン着 16：15

2 月 23 日（木）ベルリン泊

午前 ダーレム博物館見学

午後 森鷗外記念館見学

2 月 24 日（金）ドレスデン泊

- ベルリン発 8:00→ドレスデン着 10:00 鉄道
 午後 ザクセンフォークアート美術館見学
 2月25日(土) ドレスデン→ニュールンベルグ移動・泊
 午前 ザクセンフォークアート美術館見学(再訪)
 クーゲルゲンハウス見学
 午後 ドレスデン発 14:00 ニュールンベルグ着 19:00
 2月26日(日) ニュールンベルグ泊
 午前 ゲルマン国立博物館見学
 午後 おもちゃ博物館見学
 2月27日(月) ニュールンベルグ発 10:00 フランクフルト着 11:30 泊
 午後 ゲーテハウス見学
 2月28日(火) フランクフルト発 13:45
 2月29日(水) 中部国際空港着 9:20

2. 調査報告

(1) ダーレム博物館 (die Museen Dahlem)

ドイツが収集した世界各国の民俗・民芸品の壮大なコレクション館である。その中で、折り紙に関するものとしては、タイ国の切り紙・折り紙についての展示写真が印象に残った。日本国コーナーを含めて他に折り紙資料は見当たらなかった。

(2) 森鷗外記念館 (Mori-Ôgai-Gedenkstätte)

この記念館は文豪森鷗外がベルリン留学時(1884年~1888年)に下宿していた家の2階を、フンボルト大学附属森鷗外記念館として1984年に開設されたものである。

当初折り紙作品を期待しての訪問ではなかったが、受付コーナーを始めとして館内の其処ここに折り紙作品が飾ってあり、大変驚いた。スタッフ(留学中の日本人アルバイト生)にこの記念館と折り紙の関係について尋ねたところ、由来は不明だがかなり以前から置いてあったとのことであった。作品は日本のものと全く同じものは見受けられなかったが、“双頭の鶴”など日本の“鶴”に酷似しているものから、フレーベルの折り紙に近い幾何学模様折り、薔薇の花・くすだまなど多種多様な立体作品があった。

(3) ザクセンフォークアート美術館 (Museum für Sächsische Volkskunst)

ドレスデンにあるこの美術館は、衣装、玩具、人形、家具などあらゆるジャンルの民芸品の蒐集館である。この美術館は、今回の調査旅行のメイン施設の一つで、「1810年から20年ごろに折られたものと考えられている、騎士や馬の折り紙」⁴⁾が一体どのようなものなのか期待を膨らませつつ目的地を目指した。ドレスデンの駅近くでレ

ンタカーを借り、同行者の運転により途中何度か道を尋ねながら到着した。

ドアを押して中に入ると案内カウンターがあり、女性係員が一人待機していた。早速入館料を支払い、チケットを購入する。その係員に日本からこの館内にあるという折り紙作品の調査にきたことを伝え、該当する品の場所について聞く。ところが「その作品については知らない」、「自分はアルバイトなので詳しいことは分からない」、「他に詳しい学芸員はいない」と言う。止むを得ず自ら探すこととし、3階まである館内を順に見て行った。ところがそれらしいものは見つからず、何度も隈なく探し回ったが、どうしても探し当てることができなかった。木製の人形群や布製の玩具はあったが、紙製のものはなかったのである。収蔵品の図録があったので、それを購入して探してみたがそこにも見つけることはできなかった。何か納得できないまま館を後にした。

翌日ドレスデンを去る前に、「もう一度美術館に行ってみよう」という同行人の声に引っぱられ、再度訪問した。すると、「本日は詳しい学芸員がいます」とのことで、奥の部屋から出て来て対応して下さった（平日は常駐せず、土曜日には出勤していることが分かった）。改めて主旨を伝え、「それならありますよ。2階のガラスケースに収められています」と言って、その場所まで案内して下さい。「ただし、撮影は禁止です」と念押しされた。そこに目指していた折り紙作品を見つけたことができた。それは、黒い模様の付いた兵士の折り紙6個であった。その前に示してあった作品の名前は以下の通りである。

Gekniffene Papiersoldaten

Vermutlich Umgebung von Dresden Um 1820

その学芸員の方は折り紙を歴史的に研究するというのではなく、個人的に興味を持ち、折り紙サークルに入って活動をされているようであった。彼女の作品が何点か受付けカウンターの奥の棚に陳列されていた。時折この館の古い折り紙作品に関心を持って訪ねて来る人がいるということは承知されていたが、それ以上の探求は無理であった。「この折り紙作品を探して日本から来た。何とか写真撮影したい」と訴えると、「それなら複製だけと置いてある個人博物館が近くにある」とクーゲルゲンハウスを紹介して下さい。そのクーゲルゲンハウスのホームページ⁵⁾の一面をコピーして下さいのを見て驚いた。何と先程見た作品に酷似した“馬と騎士”が掲載されていたのである。クーゲルゲンハウスの場所を教えてもらったところ、当館から1~2 km離れた金色の像の道の左の建物の3

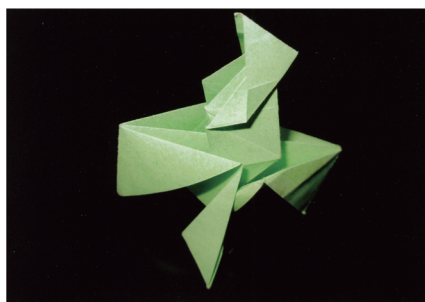


写真 1

階にあるということで、予定外ではあったが急遽訪ねることに決めた。このザクセンフォークアート美術館の立ち去り際、その学芸員の方が自分で折った作品の“馬と兵士”を下さった。それが写真1である。

(4) クーゲルゲンハウス (KÜGELGENHAUS)

クーゲルゲンハウスへの道は込み入って分かりにくく、車を大通り近くの駐車場に止めた後、何度も通行人に聞き、最後は親切な老人にそのハウスがあるという建物の前まで連れて行ってもらった。

建物の3階に上がり、クーゲルゲンハウスという標札の付いたドアを押して中に入った。受付カウンターに一人の女性がおり、ふと目を遣ると、何とカウンター越しの棚に先程ホームページで見た折り紙の“馬と騎士”に似た作品が数個並べて置いてあった。事情を説明し撮影許可を求めると、「どうぞ」と言い、作品を棚からカウンターまで移動して下さった。思いがけない展開にドキドキしながら撮影を行った。それが写真2および3⁶⁾である。ホームページの作品と比べると帽子の形や騎士の服の色が違っているが、全体の様相はそっくりである。



写真2

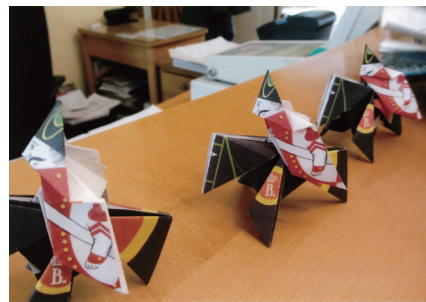


写真3

このクーゲルゲンハウスはドレスデンの貴族クーゲルゲン家の所蔵品を公開している博物館であった。この代々の当主の一人が折り紙に関心を寄せていたらしく、博物館の紹介書⁷⁾にもそれに触れた記述があり⁸⁾、博物館のホームページにも Origami-Kunst という紹介記事がある。後者を日本語に訳したものが以下の通りである。

折り紙の芸術

折ること 紙ナプキンの芸術

馬と騎士

作品の「馬と騎士」は、ドイツ人の画家であり教育者のアドルフ・ゼンフにより、1809年から1812年の間にドレスデンで発明されたものである。作品は馬と騎士の二つの部分で構成されている。馬と騎士、両方とも、元はヨーロッパで創作された「パヤリータ」という型に基づいている。写真で見られるものは、おそ

らくウイルヘルム・フォン・クーゲルゲンによって1840年頃、彼の息子のために折られたものである。折り紙でない部分は、手書きで色が塗られ、帽子も折り紙でなく装飾されている。⁹⁾

日本語訳／宮田 Susanne

これによると、折り紙“馬と騎士”の作品の出所、創作者並びに創作年地の特定がされている。折り紙のルーツを訪ねて日本から来たということから、学芸員の方は他にも資料があるという場所の情報を教えて下さった。このドレスデンという地はドイツの中でも折り紙が昔から盛んであったこと、その創始者についても広く認知されているような話し振りであった。ただし館内の展示品の中に折り紙作品は見当たらなかった。

(5) ゲルマン国立博物館 (Germanisches Nationalmuseum)

この博物館はホームページによると、「フランケン地方の貴族のハンス・フォン・ウント・ツー・アウフゼースの提唱により、1852年に創立された、ニュルンベルグにあるゲルマン国立博物館はドイツ最大の文化史博物館の一つです。先中・初期中時代から現在までのドイツの文化と芸術の重要なコレクションが展示されています。」¹⁰⁾と紹介されている。

広大な面積を誇るこの博物館の大きさにまず圧倒された。どこに折り紙があるのか皆目見当がつかず、正面入り口の受け付けにいた係員に聞いたところ、「分からない」と言う。止むを得ず一通り館内を巡ることとした。しかしどこにもない。それで再度受け付けに行き、尋ねた。「折り紙が必ずあるはずだが」と食い下がると、「折り紙という言葉は知っているが、その作品はこの本館にはない」と言う。そして「もしあるとすれば、World of Play 館だろう」と示唆された。結局探しに探して本館から離れた場所で、それらしい建物、

GERMANISCHES NATIONAL MUSEUM SPIELZEUGSAMMLUNG

と銘打たれた別館を見付けた。早速階段を上がってドアを開けると、受け付けに男性がいた。その方に折り紙のことを尋ねると、即座に「ある」との返事であった。そこで教えてもらった場所に行くと、陳列ケースの中の一つの台座に“馬と騎士”あるいは“馬と兵士”が三十個位ぎっしり詰めて飾ってあった。横には、木製の“馬と騎士”、“馬と兵士”が同じように飾ってあった。ここでは撮影が許可されたため貴重な資料の収集ができた。なおプレートには、

Soldaten

Sachsen, 18. Jahrhundert

Papier, geknifft

Iriv. Nr. HG 8800

とあった。図録、所蔵品目録のようなものはなかった。

(6) おもちゃ博物館 (Spielzeugmuseum)

おもちゃの町として知られているニュルンベルグにあって、多種類のおもちゃを展示・販売している博物館である。筆者の訪れた日も大変な人で賑わっていた。しかしながら折り紙に関するものはなかった。

3. 終わりに

今回の調査旅行を通して、事前の情報通りにドイツに残されていた折り紙作品を目にすることができた。加えて、実際に足を運んだことから、その具体的な形を始めとして、ルーツに関する新たな情報や資料を得ることができた。特にドイツでの折り紙作品の処遇を目にし、約 200 年もの間、紙を折ったに過ぎない小さな子ども用の作品が大切に保管され続けていること、おそらくわが国以上に戦火を潜ってきたこの国で継承されてきた事実をどのように受け止めるのかについても思考したい。作品の種類に関しては、“馬と騎士、兵士”という限られたものであったが、このこととわが国の折り紙作品の関係や折り紙のルーツ・伝播の解明については今後の検討課題となろう。今回の成果を基に引き続き探究してゆきたい。

■注

- 1) <http://ja-jp.facebook.com/pages/2012/05/27> 閲覧
- 2) 同上
- 3) <http://origami.ousaan.com/libraryj.html> 2012/05/27 閲覧
- 4) 同上
- 5) <http://www.origami-kunst.de/evets/vielfalten/ross-und-reiter.html> 2014/1/6 閲覧
- 6) 筆者の撮影した写真を本稿に掲載する許可を求める遣り取りの中で、「2007 年以降に馬と騎士をアドルフ・ゼントフによって発案された折り紙をコピーした折り紙を、美術館の来場者といっしょに作っています。その写真をお送りします。(日本語訳／宮田俊雄)」という館長からのメールをいただいた。
添付されていた写真からアドルフ・ゼントフが発案した作品の複製品ということが明らかになった。
- 7) Gunter Klieme・Hans Joachim Neidhardt 『KÜGELGENHAUS MUSEUM DRESDNER ROMANTIK』, Deutscher Kunstverlag Munchen Berlin, ISBN 978-3-422-02151-8
- 8) この件については、本学の浪川幸彦教授よりご教示いただいた。
- 9) 原文からの翻訳は、愛知淑徳大学の宮田 Susanne 教授による。
- 10) http://www.visit-germany.jp/JPN/culture_and_events/museums_tlmuseum-id-1156-fst 2011/10/31 閲覧

■付記

今回の調査に際し、旅程の計画・実行・現地案内・通訳業務等で高池勝彦・俊子夫妻に多大なご協力をいただいた。また、本学教育学部の浪川幸彦教授からは、多角的見地から助言・激励をいただき、同宮田俊雄教授には、ドイツ語に関し翻訳等の労作をおかけした。資料確認の作業を本学教育学部3年生伊藤真緒さんをお願いした。皆様に心より感謝申し上げる。